

## 『十訓抄』(会話文)の敬語

——せ(させ)給ふ・給ふ・る(らる)——

泉 基 博

一

『十訓抄』(地の文)に於ける「せ(させ)給ふ」・「給ふ(補助動詞・四段)」・「る(らる)」の使用状況、敬意度、敬語史的的位置等について明らかにしたことを踏まえて、この稿では『十訓抄』(会話文)に於ける「せ(させ)給ふ」(以下「せ給ふ」で代表させる)・「給ふ(補助動詞・四段)」・「る(らる)」(以下「る」で代表させる)の使用状況、敬意度、敬語史的的位置等について考察してみようと思う。『十訓抄』は古典文庫版『十訓抄』を使用する。なお心話・つぶやきは会話文に含めるが、間接話法いわゆる二重カギカッコは会話文から除くことにする。

二

「せ給ふ」の使用対象を整理すると次のようになる。位階・官職等はその人物の最終のもので整理することにす

る。以下同じくする。なお敬意の対象が三人称の場合には\*印を付すことにする。以下同じくする。「○→△」は、○が△に対して敬語を使用したことを示す。以下同じくする。

フルトヒ(コトヤウナル法師)→西塔ニ住セル僧(第一の九話)<sup>(2)</sup> 1例・\*江匡衡(大江匡衡・式部大輔正四位下)

↓太子(後一条天皇、第一の二四話) 2例・\*女房↓土左判官代道清(源道清、第一の五三話) 1例・\*上東門院(一条天皇中

判官代道清(源道清、第一の五三話) 1例・恵心僧都↓檀那僧都(第三の一六話) 1例・\*女房↓土左

宮)→一条天皇(第六の一四話) 1例・宇治殿(藤原頼通・摂政関白太政大臣従一位)↓中納言頭基卿(源頭基・権

中納言従三位、第六の一四話) 1例・式部丞藏人藤原貞高↓小野右大臣(藤原実資・右大臣従一位、第六の三六

話) 1例・\*小野皇太后宮↓白河院(第七の三話) 1例・\*深覚僧正↓宇治殿(藤原頼通・摂政関白太政大臣従一

位、第七の一〇話) 1例・\*禪師ノ君↓高き人ノ姫君(第七の二七話) 1例・侍↓禪師ノ君(第七の二七話) 1例

・禪師ノ君↓妻(第七の二七話) 1例・侍↓家主(宿ノ主ノ僧、第七の二七話) 2例・祭主三位輔親(大中臣輔親

・非参議正三位)↓時ノ歌読共(第七の三四話) 1例・三条内大臣(藤原公教・内大臣正二位)↓客人(第八の二

話) 1例・\*鳥羽法皇↓天神(菅原道真・右大臣従二位、第一〇の一五話) 1例・良仁(ヒシリ)↓尾張(女房、

第一〇の六三話) 1例・中院入道右府(源雅定・右大臣正二位)↓中院僧正(定遍、第一〇の七五話) 1例

右記の用例を見ると、全用例数は二三例で、二人称に二三例、三人称に九例使用されていることがわかる。

三人称に九例使用されているものの内、使用対象が天皇・上皇・太子・摂政関白であるものが五例あるということ

は、「せ給ふ」の敬意度が高いことを示していると言える。また右記の用例で、発話者が使用対象より身分が高い

(両者の間に於いて位階・官職の差がはつきりと認められるものに限定して)用例が二例あることがわかる。一例

は「宇治殿(藤原頼通・摂政関白太政大臣従一位)↓中納言頭基卿(源頭基・権中納言従三位、第六の一四話)」

で、これは「宇治殿ハ『後世ニハ必導セ給ヘ』ト示給テ」とある箇所、宇治殿が頭基卿に頼み込んでいる箇所

あり、人に頼むという心情から宇治殿が「せ給ふ」を使用したものと思われる。もう一例は「鳥羽法皇↓天神（菅原道真・右大臣從二位、第一〇の一五話）」で、これは「天神ノ見サセ給ツル、イカナル御事ノ有ソ」とある箇所、鳥羽法皇の夢に天神が現れ、目が覚めて鳥羽法皇が発話したものである。これは神に対して「せ給ふ」を使用したもので、違和感がないと言えないこともないが、この直前に「我ハ北野ノ右近馬場ノ神ニテ侍。目出事ノ侍ル。御使給テミセ候ハン」ト申給ト思食テ」とあり、「我ハ……候ハン」は天神の発話であるが、「ト申給」と天神に謙讓語「申す」が使用されていることを考え合わせると、天神が夢に現れたという感動から鳥羽法皇が使用したものと思われる。

## 三

「給ふ」の使用対象を整理すると次のようになる。但し、二重敬語（動詞《尊敬》・助動詞《尊敬》＋「給ふ」、但し「せ給ふ」については二項参照）は別に整理することにする。

蜂（カキノ水干・袴着タル男）↓余吾大夫（第一の八話） 6例・西塔ニ住セル僧↓フルトヒ（コトヤウナル法師、第一の九話） 2例・\*西塔ニ住セル僧↓釈迦如来（第一の九話） 1例・フルトヒ（コトヤウナル法師）↓西塔ニ住セル僧（第一の九話） 5例・\*フルトヒ（コトヤウナル法師）↓護法天童（第一の九話） 2例・或宮原ノ女房↓薩摩守忠度（平忠度・薩摩守正四位下、第一の一七話） 1例・女房↓土左判官代道清（源道清、第一の五三話） 1例・源経兼（下野守ニテ在国ノ時）↓或者（第一の五六話） 2例・\*伊家弁（藤原伊家・右中弁民部大輔正五位下）↓三河守知房（藤原知房・從四位下、第一の六六話） 1例・女房↓匡房卿（大江匡房・權中納言正二位、第三の二話） 1例・\*老タル尼↓菅三位（菅原文時・非參議從三位、第三の三話） 1例・伊遠（相撲）↓弘光（相撲、第三

の二一話) 1例・\*性空聖人↓普賢菩薩(第三の一六話) 1例・年高キ人↓粟田讃岐守兼房(藤原兼房・中宮亮正四位下、第四の二話) 1例・盛重(従五位上)↓泰忠(伝未詳、第四の三話) 1例・\*人々↓右中弁惟家(伝未詳、第四の四話) 1例・\*仁俊(阿闍梨)↓神(北野天満宮の神、第四の六話) 1例・\*比巴ノ師(ナニカシ)↓土左大将(藤原師長・太政大臣従一位、第四の八話) 1例・\*使者↓恵心僧都(第五の四話) 1例・\*ツカヒ人(召使)↓平中(平貞文・左兵衛佐従五位上、第五の一話) 1例・老岐ノ直祖根子↓大臣武内宿祢(第六の一八話) 1例・\*貧キ僧↓老タル母(第六の二三話) 1例・訪来ルモノトモ↓絵仏師良秀(伝未詳、第六の三七話) 1例・絵仏師良秀(伝未詳)↓訪来ルモノトモ(第六の三七話) 1例・安養尼上(恵心僧都の妹)↓小尼上(第六の三八話) 1例・\*或僧↓大明神(日吉神社の神、第六の三九話) 1例・\*人(不定)↓花園ノ北方(源有仁《左大臣従一位》の妻、第七の一六話) 1例・行綱(従四位下)↓家綱(正五位下、第七の一八話) 1例・保胤(大内記従五位下)↓文時卿(菅原文時・非参議従三位、第七の二三話) 1例・アルナマ君達↓九条民部卿頼頼(藤原頼頼・権中納言正二位、第七の三三話) 1例・\*九条民部卿頼頼(藤原頼頼・権中納言正二位)↓アルナマ君達(第七の三二話) 4例・\*従者(左衛門尉行遠の従者)↓玄蕃頭ヒサノリ(第七の三五話) 1例・男↓本ノ妻(第八の七話) 1例・\*義光(源義光・刑部少輔従五位上)↓六条修理大夫頼季卿(藤原頼季・非参議正三位、第九の二話) 2例・ナメキタル女房↓神(石清水八幡宮の神、第一〇の一話) 1例・ナメキタル女房↓娘(第一〇の一話) 2例・檢非違使↓小大進(鳥羽法皇ノ女房)(第一〇の一五話) 1例・小大進(鳥羽法皇ノ女房)↓檢非違使(第一〇の一五話) 1例・寺僧(老タル人)↓不定(第二〇の二三話) 1例・和邇郡ノ用光(伝未詳・雅楽允)↓海賊(第一〇の二六話) 2例・宗ト(海賊の首領)↓ヌシタチ(海賊達、第一〇の二六話) 1例・\*善知識ノ聖人↓菅三位(菅原文時・非参議従三位、第一〇の五五話) 1例・尾張(女房)↓良仁(ヒシリ、第一〇の六三話) 2例・道士↓唐ノ玄宗ノ御門(第一〇の六七話) 1例・\*或人↓笛吹(第一〇の七三話) 1例・醍醐ノ大僧正(仁海)↓頼基中

納言(源顕基・権中納言從三位、第一〇の七四話) 2例・顕基中納言(源顕基・権中納言從三位)↓醍醐ノ大僧正(仁海、第一〇の七四話) 1例・\*季春(郡司)↓国司(藤原師綱・宮内卿、第一〇の七六話) 1例・季春(郡司)↓藤原基衡(在国司、第一〇の七六話) 1例・\*国ノモノ共↓国司(藤原師綱・宮内卿、第一〇の七六話) 2例・季方(源義光の家来・未詳)↓家衡武衡(清原家衡・清原武衡、第一〇の七六話) 1例

\*「君ハ摂政ハノカレ給ヘルニヤ候ラム」(佐世《藤原佐世・右大弁從四位下》↓昭宣公《藤原基經・摂政関白太政大臣從一位》、第四の一六話)の「レ給へ」の「る」は自発とも取れるが尊敬として取り、「レ給へ」を二重敬語と考え、用例から除いた。

\*「無隔仰給イト、本意ニ侍リ」(アルナマ君達↓九条民部卿顯頼《藤原顯頼・権中納言正二位》、第七の三二話)は二重敬語であるので、用例から除いた。

右記の用例を見ると、全用例数は七二例で、二人称に四六例、三人称に二六例使用されていることがわかる。また使用対象が天皇・皇后・中宮・上皇・皇太后・皇太子・親王、摂政関白であるものが全くないということもわかる。このことは「給ふ」の敬意度があまり高くないことを示していると言える。また右記の用例で、発話者が使用対象より身分が高い(両者の間に於いて位階・官職の差がはつきりと認められるものに限定して)用例が四例あることがわかる。それは「九条民部卿顯頼(藤原顯頼・権中納言正二位)↓アルナマ君達(第七の三三話)」である。その箇所を次に示すことにする。

九条民部卿顯頼ノモトニ、アルナマ君達年ハ高クテ近衛司ヲ心カケ給ヒテ、或者シテ、「ヨキサマニ奏シ給ヘ」ナト云入給ヘルヲ、主ウチ聞テ、「年ハタカク今ハアルラン。何条近衛司望マル、ヤラン。出家ウチシテ片方ニ居給タレカシ」トウチツフヤキナカラ、「細ニ承リヌ。次テ侍ニ奏シ侍ルヘシ。此ホトイタハル事有テナン、カクテ聞侍ル。イト便ナク侍ト聞エヨ」トアルヲ、此侍サシ出ルマ、ニ、「申ト候。年高ク成給ヌラン。

何条近衛司望給フ。片方ニ出家ウチシテ居給タレカシ。サリナカラ細ニ承リヌ。次侍ニ奏ヘシト候」ト云。

右記の用例を見ると、藤原顕頼がつぶやきの中で或るなま君達に一例、取り次ぎの侍が或るなま君達に伝える藤原顕頼の言葉の中に三例使用されていることがわかる。後者の三例は間接話法的であるが、前者の一例はつぶやきの中で用例であり、藤原顕頼が或るなま君達に「給ふ」を使用しているのである。藤原顕頼と或るなま君達(この事件の後近衛少将になる)との間には画然とした身分差があるので、身分の高い者が身分の低い者に「給ふ」を使用していることになる。この箇所には、藤原顕頼に厄介感・億劫感はあると言えるが、厄介感・億劫感から、藤原顕頼は或るなま君達に「給ふ」を使用したのであろうか。それも聞き手意識のないつぶやきの中で。どうもこの箇所はすっきりしない。

右記の用例で、敬語使用法に於いて注目しなければならないことがある。それは藤原顕頼のつぶやきに於ける敬語使用と、取り次ぎの侍の発話に於ける敬語使用との間に違いがあるということである。両者の敬語を比較してみることにする。

年ハタカク今ハアルラン。何条近衛司望マル、ヤラン。出家ウチシテ片方ニ居給タレカシ

年高ク成給ヌラン。何条近衛司望給フ。片方ニ出家ウチシテ居給タレカシ

右記の用例を見ると、取り次ぎの侍が藤原顕頼のつぶやきの「年ハタカク今ハアルラン」には「給ふ」を添加し、「何条近衛司望マル、ヤラン」では「る」を「給ふ」に改変していることがわかる。この敬語の添加・改変は、取り次ぎの侍の聞き手意識によるものであると言える。そして「居給」の「給」は改変せずに、「る」を「給ふ」に改変しているということは、「給ふ」の方が「る」より敬意度が高いことを示していると言える。

次に発話者が使用対象より身分が高いと思われるもの(両者間にははっきりとした身分差は認められないが)に「行綱(従四位下)↓家綱(正五位下、第七の一八話)一例」があるが、これは弟が兄に「ハヤシ給へ」と頼んでい

るものである。また「ナマメキタル女房↓娘（第一〇の一一話）二例」は、母親が娘に「神モ哀ト思食ハカリ申給ヘキニ、思事ナケニネ給ヘルウタテサヨ」と不満を言ったものである。また「和邇郡ノ用光（伝未詳・雅楽允）↓海賊（第一〇の二六話）二例」・「宗ト（海賊の首領）↓ヌシタチ（海賊達、第一〇の二六話）一例」は、楽人和邇郡の用光が海賊に殺されそうになった時、海賊達に向かつて「トク何物ヲモ取給ヘ（諦念感がある）……サル事コソ有シカト、後ノ物語ニモシ給ヘ」と哀願したのに対して、海賊の首領が海賊達に向かつて「ヌシタチシハシ待給ヘ」と命令したものである。以上のように見て来ると、これらの用例は、相手（聞き手）に対して依頼・哀願・命令しているものと、発話者の不満感・諦念感を相手（聞き手）に言っているものであることがわかる。そしてこれらの「給ふ」は、六例中四例も命令形であることから、命令を和らげようとする意識から使用されたものであるとも言える。すなわちこれらの「給ふ」は、相手（聞き手）に依頼・哀願・命令する場合、または相手（聞き手）に不満感・諦念感を言う場合には、発話者が相手（聞き手）の感情を少しでも和らげようとして使用したものであると言える。このように解すると、どうもすつきりしなかった前述の、つぶやきの中で藤原顕頼が或るなま君達に「給ふ」を使用した用例もうまく解することが出来ると思う。すなわち、聞き手意識のないつぶやきの中で「給ふ」が使用されているが、「居給タレ」が命令形であるので、それを和らげるために使用したと解したい。つぶやきから聞き手意識はないではないかということになるが、命令を和らげようとする習慣的な意識がここに出たと解したい。また前述の「宇治殿ハ『後世ニハ必導セ給ヘ』ト示給テ」（第六の一四話）にも宇治殿に命令を和らげようとする意識があったと解したい。なお二重敬語（明確なもの）は、前述の「無隔仰給イト、本意二侍リ」（第七の三三話）の一例だけである。

## 四

「る」と「せ給ふ」・「給ふ」との敬意度を比較するには、「る」の使用対象を一般尊敬に限定しなければならないので、まず一般尊敬の「る」の使用対象を整理することにする。但し、二重敬語(動詞《尊敬》+「る」、および前述の「君ハ摂政ハノカレ給ヘルニヤ候ラム」《第四の一六話》)は別に整理することにする。また、尊敬にも受身にも取れるもの、尊敬にも自発にも取れるもの、尊敬にも可能にも取れるものは尊敬として整理することにする。

侍従大納言(藤原成通・大納言正二位)↓武正(舍人、第一の二二話) 1例・知房(藤原知房・從四位下)↓伊家(藤原伊家・右中弁民部大輔正五位下、第一の六六話) 1例・伊遠(相撲)↓弘光(相撲、第三の一話) 1例・弘光(相撲)↓伊遠(相撲、第三の一話) 1例・讃岐三位(藤原季行・非参議從三位)↓清輔(藤原清輔、正四位下、第四の八話) 1例・橘贈納言広相(参議正四位上)↓東宮御息所(第五の一五話) 2例・貧キ僧↓官人(第六の二三話) 1例・小尼上↓盗人トモ(第六の三八話) 1例・\*公卿↓六条前斎院(祿子内親王、第七の四話) 1例・\*有職↓六条前斎院(祿子内親王、第七の四話) 2例・\*有職↓不定(第七の四話) 1例・四条大納言(藤原公任・権大納言正二位)↓匡衡(大江匡衡・式部大輔正四位下、第七の九話) 1例・\*家司↓深覚僧正(第七の一〇話) 1例・\*顕仲入道(源顕仲・非参議從三位)↓馬助(正六位下に相当、第七の二〇話) 1例・\*九条民部卿頼(藤原頼頼・権中納言正二位)↓アルナマ君達(第七の三三話) 1例・\*太宰大式高遠(藤原高遠・非参議正三位)<sup>(4)</sup>↓アル殿上人(第七の三六話) 1例・大御室(師明親王)↓成就院僧正(寛助・大僧正、第九の一話) 1例・白河院↓六条修理大夫顕季卿(藤原顕季・非参議正三位、第九の二話) 1例・\*村上天皇↓兼明親王(第一〇の一話) 2例・\*中納言右衛門督伊陟卿(源伊陟・中納言正三位)↓兼明親王(第一〇の一話) 1例・御堂関白(藤原



道長・摂政太政大臣従一位)↓四条大納言(藤原公任・権大納言正二位、第一〇の三話) 1例

右記の用例を見ると、全用例数は二四例で、二人称に一四例、三人称に一〇例使用されていることがわかる。また三人称に一〇例使用されているものの内、使用対象が親王であるものが六例(六条前斎院《三例》・兼明親王《三例》)もあることがわかる。「せ給ふ」・「給ふ」に於いては使用対象が親王であるものは全くないことから、これは親王に対する待遇が天皇・皇后・中宮・上皇・皇太后・皇太子より低いことを示しているのであろうか。しかし、「給ふ」に於いて使用対象が天皇・皇后・中宮・上皇・皇太后・皇太子であるものが全くないことから、簡単にそうとも言えない。そこで地の文に於いて、使用対象が親王であるものの用例を整理してみることにする。

「せ給ふ」三例：成明親王(第七の八話) 二例・高陽院ノ姫君(叡子内親王、第八の三話) 一例

「給ふ」五例：……貞実親王(第五の序) 一例・三条院皇女前斎宮(当子内親王、第五の一一話) 二例・高岳ノ親

王(第五の一六話) 一例・御子(具平親王、第七の二三話) 一例

「る」七例：……前中書王(兼明親王、第六の三三話) 一例・六条前斎院(祿子内親王、第七の四話) 二例・成

明親王(第七の八話) 二例・大御室(師明親王、第九の一話) 一例・大斎院(選子内親王、第

一〇の四〇話) 一例

右記の「せ給ふ」・「給ふ」・「る」の用例数はあまり多くないが、それぞれの地の文に於ける、使用対象が天皇・皇后・中宮・上皇・皇太后・皇太子・親王である用例数(「せ給ふ」六三例・「給ふ」五四例・「る」三九例)に対する比率は、「せ給ふ」が四・八%、「給ふ」が九・三%、「る」が一七・九%である。用例数が多くないので(「せ給ふ」三例・「給ふ」五例・「る」七例)、はっきりしたことは言えないが、このことは親王に対する待遇意識が天皇・皇后・中宮・上皇・皇太后・皇太子より低いことを示していると言つて良いのではなからうか。

次に右記の用例で、発話者が使用対象より身分が高い(両者の間に於いて位階・官職の差がはっきりと認められるものに限定して)用例についてであるが、一一例あることがわかる。「る」については、尊敬にも受身にも取れるもの、尊敬にも自発にも取れるもの、尊敬にも可能にも取れるものも尊敬として整理したので、この一一例については、検討してみることにする。

「侍従大納言(藤原成通・大納言正二位)↓武正(舍人、第一の二二話)一例」は「何コトニ来ラレタリケルソ」とあるもので、尊敬である。

「知房(藤原知房・従四位下)↓伊家(藤原伊家・右中弁民部大輔正五位下、第一の六六話)一例」は「是ニヨリテ如此イハル、尤奇怪ナリ」とあるもので、受身にも取れる。

「讃岐三位(藤原季行・非参議従三位)↓清輔(藤原清輔・正四位下、第四の八話)一例」は「其道ノ人ニ尋ラルヘシ」とあるもので、尊敬である。

「四条大納言(藤原公任・権大納言正二位)↓匡衡(大江匡衡・式部大輔正四位下、第七の九話)一例」は「貴殿ハカリソ書ヒラカレムト思フ」とあるもので、可能にも取れる。

「\*顕仲入道(源顕仲・非参議従三位)↓馬助(正六位下に相当、第七の二〇話)一例」は「馬助コソマイリヨラレケレ」とあるもので、受身にも取れる。

「\*九条民部卿顕頼(藤原顕頼・権中納言正二位)↓アルナマ君達(第七の三三話)一例」は、つぶやきの中で「何条近衛司望マル、ヤラン」とあるもので、尊敬である。

「大御室(師明親王)↓成就院僧正(寛助・大僧正、第九の一話)一例」は「イツクヘユカレタリツルソヤ」とあるもので、尊敬である。

「白河院↓六条修理大夫顕季卿(藤原顕季・非参議正三位、第九の二話)一例」は「申所ハイハレタレトモ、

我思ハ彼ヲサリテ彼ニトラセヨカシ」とあるもので、尊敬である。

「\*村上天皇↓兼明親王(第一〇の一話)二例」は「故宮ハ常ニ何ヲカセラレシ」・「定テ伝ヘラレタルラン」とあるもので、前者は尊敬であるが、後者は受身にも取れる。

「御堂関白(藤原道長・摂政太政大臣従一位)↓四条大納言(藤原公任・権大納言正二位、第一〇の三話)一例」は「イツレノ舟ニノラルヘキヤ」とあるもので、尊敬である。

右記の一一例中七例は完全に尊敬である。七例についてであるが、七例中五例は質問形式の文中で使用されていることがわかる。後の二例について見てみると、「讃岐三位(藤原季行・非参議従三位)↓清輔(藤原清輔、正四位下、第四の八話)一例」は、清輔が非常に困っていた時に、讃岐三位が「其道ノ人ニ尋ラルヘシ」と言ったものである。そこには讃岐三位の清輔に対する気配りがあると言える。「白河院↓六条修理大夫顕季卿(藤原顕季・非参議正三位、第九の二話)一例」は、顕季卿が土地争いで自分の方が道理にかなっていることを言ったところが、白河院が「申所ハイハレタレトモ、我思ハ彼ヲサリテ彼ニトラセヨカシ」と言ったもので、「申所ハイハレタレトモ」には白河院の顕季卿に対する気配りがあると言える。このように見て来ると、質問形式の文は相手に尋ねているのであるから、当然相手および相手に関する者に対する気配りがあっても良いはずである。質問形式の文中で使用されている五例について見てみると、「何コトニ来ラレタリケルソ(第一の二一話)」には、説話内容(侍従大納言の粋な計らい)からすると、侍従大納言の気配りがあると言える。「何条近衛司望マル、ヤラン(第七の三二話)」はつづきであるが、この箇所は「年ハタカク今ハアルラン。何条近衛司望マル、ヤラン」とあり、「年ハタカク今ハアルラン」とあることを考え合わせると、「何条近衛司望マル、ヤラン」には顕頼の気配りがあると言える。「イツクヘユカレタリツルソヤ(第九の一話)」は、当時阿闍梨だった成就院僧正は大御室から約束の恩賞が貰えず、恩賞授与の当日姿を見せなかったが、日が高くなってやって来たので、大御室が「イツクヘユカレタリ

ツルソヤ」と尋ねたものである。ここにも大御室の気配りがあると言える。「故宮ハ常ニ何ヲカセラレシ(第一〇の一話)」は、村上天皇が今は亡き弟の兼明親王(三人称)に使用したもので、故人で親王であった者に対する村上天皇の気配りがここにはあると言える。「イツレノ舟ニノラルヘキヤ(第一〇の三話)」には、詩も和歌も出来る四条大納言に対する御堂関白の気配りがあると言える。

以上のように考察して来ると、発話者が発話者より身分が低い(両者の間に於いて位階・官職の差がはっきりと認められるものに限定して)者に使用している「る」は、発話者の使用対象への気配りから使用されたものであり、質問形式の文中で使用されることが多いと言える。なお、この「る」は気配りから使用されたものであり、敬意はそう高くはなく軽いものであったと考えられる。

次に発話者が使用対象より身分が高いと思われるもの(両者間にははっきりとした身分差は認められないが)に「小尼上」↓「盗人トモ(第六の三八話)一例」があるが、これは「是ヲオトサレニケリ」とあるもので、自発にも取れるものである。

二重敬語の使用対象を整理すると次のようになる。

思し召さる……成通卿(藤原成通・大納言正二位)↓源師頼(大納言正二位、第一の六一話) 1例・\*小大進(鳥羽法皇ノ女房)↓鳥羽法皇(第一〇の一五話) 1例

仰せ下さる……\*家綱(藤原家綱・正五位下)↓堀河院(第七の一八話) 1例

仰せらる……\*女官↓女房(第一の五三話) 1例・\*俊頼(源俊頼・木工権守従四位上)↓公達(第一の六一話)

1例・\*後江相公(大江朝綱・参議正四位下)↓菅丞相(菅原道真・右大臣従二位、第四の一〇話)

1例・\*長能(藤原長能)↓大納言(藤原公任・権大納言正二位、第四の一七話) 1例・\*禪師

(僧侶)↓高キ人ノ姫君(第七の二七話) 1例

聞こし召さる……\*宮内卿師綱（大膳大夫）↓君（白河院、第二〇の七六話） 1例

召さる……佐実（藤原佐実・伊勢守従五位下）↓花園ノオト、（源有仁・左大臣従一位、第四の三話） 1例

れ給ふ……佐世（藤原佐世、右大弁従四位下）↓昭宣公（藤原基経・摂政関白太政大臣従一位、第四の一六話）

1例

\*「れ給ふ」については、「摂政ハノカレ給ヘルニヤ」とあるもので、平仮名本では「摂政のかせ給へるにや」とある（諸本間の表記は無視）。

右記の用例を見てみると、全用例数は一一例で、二人称に三例、三人称に八例使用されていることがわかる。また右記の用例で、発話者が使用対象より身分が高い（両者の間に於いて位階・官職の差がはっきりと認められるものに限定して）用例は一例もないことがわかる。このことは二重敬語の敬意度が非常に高いことを示していると言える。ここで、「せ給ふ」・「る（二重敬語）」・「給ふ」・「る（単独）」の人称別用例数を整理してみることとする。

	二人称	三人称	合計
せ給ふ	13	9	22
る（二重敬語）	3	8	11
給ふ	46	26	72
る（単独）	14	10	24

右記の整理表を見ると、「せ給ふ」・「給ふ」・「る（単独）」に於いては二人称の用例数が三人称の用例数より多いが、「る（二重敬語）」に於いては逆に三人称の用例数が二人称の用例数より多いことがわかる。このことは、「る（二重敬語）」が二人称に使用されにくいことを示していると言える。使用対象が二人称になると、聞き手意識

によって敬意度が一段高い敬語を使用することがある(取り次ぎの侍が聞き手意識によって「る」を「給ふ」に改変した例《三項参照》)ことを考え合わせると、「る(二重敬語)」が二人称に多く使用されても良いはずであるのにもかかわらず、「る(二重敬語)」が二人称にあまり使用されていないということは、「る(二重敬語)」の敬意度が非常に高いことを示していると言える。

最後に公尊敬を整理すると次のようになる。

当世ハ除目行ハル、ニ(イヤシキツカサ人↓邑上帝、第三の一四話) 1例/罪ヲ被行事(貧キ僧↓官人、第六の二三話) 1例

## まとめ

一、「せ給ふ」の敬意度は高いが、「給ふ」の敬意度はあまり高くない。

一、聞き手意識によって、発話者が相手(聞き手)に敬意度が一段高い敬語を使用することがある。

一、「給ふ」は「る(単独)」より敬意度が高い。

一、発話者が相手(聞き手)に、依頼・哀願・命令する場合、または不満感・諦念感を言う場合に使用する「給ふ」は、発話者が相手(聞き手)の感情を少しでも和らげようとして使用したものである。またこの「給ふ」は命令形で使用されることが多い(常態では命令形が多いため)ので、命令を和らげようとする意識から使用されたものとも言える。

一、親王に対する待遇意識は天皇・皇后・中宮・上皇・皇太后・皇太子より低い。

一、発話者が発話者より身分の低い者に使用している「る」は、発話者の使用対象への気配りから使用されたもの

であり、質問形式の文中で使用されることが多い。なお、この「る」の敬意度はそう高くはなく軽いものである。

一、「る（二重敬語）」の敬意度は非常に高い。

注

- (1) 拙稿『甲南国文 第四四号』『十訓抄』（地の文）の敬語——せ（させ）給ふ・給ふ・る（らる）——」平成九年三月
- (2) 説話番号は『校本十訓抄』（平成八年三月）による。以下同じくする。
- (3) 平仮名本では「わにへのもちみつ」とある（『校本十訓抄』（平成八年三月）による）。
- (4) 『公卿補任索引』（昭和四九年八月）には「長和五年非参議正三位（以後不見）」とある。
- (5) 『十訓抄全注釈』（平成六年五月）には「『参り寄る』は、お側に近づくの意。馬助の歌が身分の上位の基俊の歌に似ている（寄る）というのである。」とある。
- (6) 『校本十訓抄』（平成八年三月）による。